

風景・風土・邂逅——風土学の理念

木岡 伸夫（関西大学教授）

はじめに

- 1 風景
- 2 風土
- 3 邂逅
- 4 かたちの論理

はじめに

6月の本会では、オギュスタン・ベルク著『風土学はなぜ何のために』の拙訳をテキストとして、「ベルクの風土学」を説明した。今回は、風土学の先駆者であるベルク、ベルクに4論を、基本的なポイントに絞って紹介する。和辻、ベルクの両先達に導かれなければ、自分自身の学問構築など思いもよらなかった、というのが事実である。とはいえ、この二人から学ぶうちに、彼らが気づかなかったか、あるいは気づいたとしても、それを追究し切ることなく終わったテーマがある、ということが見えてきた。そのテーマを考えつづける中から、私の風土学理論三部作——『風景の論理』（2007年）、『風土の論理』（2011年）、『邂逅の論理』（2017年）——を、順次世に送り出す成り行きとなった。三部作の書名に掲げた「風景」「風土」「邂逅」は、いずれも過去の哲学がその意味を解明しなかった概念であり、わが風土学理論の核心に位置づけられる。これら三つのキーワードが、それぞれどういう意味をもつか、なぜそれが重要と考えられるのか、を手短かに説明する。そのうえで、これらの概念にもとづくオリジナルな着想、〈かたちの論理〉のあらましを述べることにしたい。参考書としては、昨年刊行した最もコンパクトな新書『〈出会い〉の風土学』（幻冬舎、2018年）を挙げる。

## 1 風景

### 異なる「世界の見方」

「風景」から思い浮かぶのは、風景画や風景写真のように、自然の中から「美しい」眺めを切り取ることによって、仕上げられたイメージである。もちろん、それが「風景」の一般的意味であることに、間違いない。しかし、私が最初の著作『風景の論理』で扱った「風景」は、そういう美的な場面——を含むにしても——のことではなく、私たちが現に生きている

世界の見え方である。人間が世界から受けとる印象は、ふつうは感覚・知覚として言い表される。なぜ、それを「知覚」と言わずに、特別なニュアンスを帯びた「風景」という語に置き換えるのだろうか。

人が対象に接したとき、たとえば赤い花を見て、誰もが「赤い」と感じる心の働きが、「知覚」である。人間が人間であるかぎり、知覚は誰に対しても、ほぼ一様に成立する。どうしてそうなるのかを、哲学は認識論の問題として考える。何か不都合な点が、そこにあるだろうか——何もない。けれども、「知覚はみんな同じだ」と言うだけですまされない事態が、いろいろ生じてくる。例えば、月の知覚。仲秋の名月に行われる「お月見」の風習は、他の国にはない、日本だけの伝統である。日本人なら、月はそのとき物理的な一天体として知覚される対象ではなく、もののあわれをそそる特別の何か、として見られる。月の例に限らず、事物の見方は人類一様ではなく、地域・場所によって異なる。場所によって異なる「世界の見方」（文化地理学者コスグローヴの言葉）が、「風景」である。

### 同一性と差異

月は、どこの誰が見ても、同じ球体として知覚される。こと「知覚」に関して、地域や文化による異なりは、ふつう問われない。だが、それを見る場所によって異なる見方が成立することを、月見の例は教える。哲学は同一性を追究する。それに対して、場所によって異なる世界の見方を、「風景」として問題にするのが、風土学である。二つの学問の重点は、それぞれ「同一性」と「差異」に置かれる。この違いは、どこから生じるのだろうか。

哲学は、同じ世界に生きている人間が、基本的にみんな同じようにものを見る、という理屈を証明する。そうでなければ、世界の意味を統一することが不可能になるからだ。しかし、地球上の人類は、全員が同じ一つの世界に生きているわけではない。さまざまに異なる地域において、違った風に世界をとらえ、異なる生き方を実行している。人々を同じ一つの世界に囲い込もうとするか、地域ごとにバラバラのままですとよとするか。前者は、西洋が近代世界を形成する際にとった戦略である。ヨーロッパが他の諸地域に進出・侵略し、よその民族に対して、自分たちと同じ世界の見方をするように仕向ける。それに成功すれば、西洋世界をそのまま拡張した巨大な帝国が、地球上に実現する。この野望に力を貸してきたのが、西洋起源の哲学である。哲学のテーマである「知覚」が、「同一性」に照準を合わせてきたのは、この理由からである。

風土学は、そういう哲学とは異なる関心に立つ。西洋がおおむね世界制覇を達成した現代、人々は同一性よりも差異に心を傾けるようになった。みんなが同じように世界を見るというのではなく、国や民族、さらに個人ごとに世界の見方は異なっており、それらを共通した一つの見方で括ることは、実情にそぐわない。ここから、「知覚」よりも「風景」を重視する方向に移動して生まれたのが、風土学である。風土学は、地域、より限定するなら、場所におけるものの見方を、「風景」として主題化する。哲学における認識論が、「知覚」を主題とするのに対し、風土学の認識論は、「風景」をテーマとする。このように風景論は、それ

自体が既存の哲学のアンチテーゼを意味する。

## 2 風土

### 環境から風土へ

「風景」が「場所ごとに異なる世界の見方」だとすると、風景の異なりは、そのまま風景を生む土地の違いを意味することになる。世界中に同じ風景がないということは、人々がみんな違った環境に生きている、ということである。生きられる環境は、人ごと、地域ごと、国ごとに異なっている<sup>1</sup>。そうした異なりを意味する言葉が、「風土」である。風土学は、哲学が用いる「環境」に代えて、人間環境を「風土」と呼ぶ。「知覚」と「風景」について述べた違いは、「環境」と「風土」の関係にも当てはまる。一对のうち、前者は同一性を表し、後者は差異を表す。風景が単なる視覚ではなく、ものの見方・認識の多様性を意味するように、風土の異なりは、そこで生きる人間の生活様式・文化の多様性そのものである。

哲学に対する風土学の立場が、ここから明らかになる。哲学は、人間をみな同じような存在と見て、その共通性を説明しようとする。これに対して風土学は、人間がそれぞれ異なる存在である——同一である面を無視するわけではないが——ことを基本として、その異なり、個性に注目する。私たちがたがいを比較した場合、よく似ている部分と、似ていない部分があることに気づく。〈似る〉と〈似ない〉のどちらかだけではなく、両方がある。このことをふまえて、人間の同一性と差異をともに追究しなければならない。

### 近代の哲学

哲学が「差異」を軽視してきたのには、理由がある。高度の文明地域（「世界」）には、かならずその世界独自の哲学が存在する。古代の地中海世界（ギリシア、ローマ）、インド世界、中国世界が、その代表例である<sup>2</sup>。三つの世界のうち、近代になって他の世界を圧倒する勢力をそなえたのが、ギリシア以来の流れを汲む西洋の哲学である。西洋近代哲学を確立したデカルトは、「われ思う、ゆえにわれあり」という根本的真理を発見し、そこから出発して、理性中心の哲学をうちたてた。理性は万人共通に存在する、というのがその基本的立場。ヨーロッパ発の近代哲学では、地域ごと、人ごとの異なりよりも、人間すべてに共通する面（理性）に光を当て、全世界、全人類を統一しようとする動きが表立つことになった。

しかし、その動きには裏がある。それは、近代世界の出発点に関係する。大航海時代、地理的発見の時代に続いて、ヨーロッパによる植民地開拓の競争が起こり、西洋が他の地域を侵略、支配することによって、「近代」が成立した。哲学的理性の普及は、同時に世界の一地域が他地域を支配する野望と表裏一体であった。インド・中国のような古代における哲学

---

<sup>1</sup> ベルクによれば、「風土」は「社会の空間と自然に対する関係」。「社会」を個人、地域、国家など、さまざまなレベルにおいて、人間環境を構成する複数の層が成立する。それらのすべてが「風土」である。

<sup>2</sup> 野田又夫『哲学の三つの伝統』岩波文庫、2013年。

の中心地域を支配し、その哲学を圧倒したのは、後者の面である。しかし非西洋には、西洋と異なる人間の生き方があり、それを理論的に体系化した哲学がある。西洋世界は、20世紀に至るまで、自分たちの文化以外の文化の価値を認めず、世界がさまざまに異なる風土から成る、という事実を受け容れることがなかった。その立場に反省を迫る動きが、日本人和辻哲郎が着手し、フランス人オギュスタン・ベルクが継承発展した風土学である。

### 3 邂逅

#### 〈あいだ〉を開く

風土の多元性がどのようにして生じるかを、私は『風土の論理』で追究した。問題は、さまざまに異なる世界(風土)があるというだけではなく、多様な世界に生きる人々が、いかにして交わり、理解し合うことができるかである。この問題を、「邂逅」(偶然の出会い)というテーマに集約して論じたのが、三部作最後の『邂逅の論理』である。

個人の水準で考えても、私が私になるということは、他人との出会いなくしては考えられない。自己と他者は、出会うことによって、たがいに異なる主体として確認される。個人よりも上位の社会(風土)は、他の風土との間に、前述した〈似る—似ない〉の関係を生み出す。自他は同じではないが、かといってまったく別々でもないような、「不一不異」の関係に立つ。この関係性を、私は〈あいだ〉と呼ぶ。近代世界は、自他を完全に切り離す二元論によって、〈あいだ〉を閉ざしてきた。その動きは、他人や自然を利用対象(すなわち資源)として見ることしかできない〈欲望の論理〉を物語っている。

#### 〈縁〉を結ぶ

いかにして、〈欲望の論理〉を克服するか。この最終課題に対して、『邂逅の論理』は、〈縁を結ぶ〉という仏教的な倫理の実践を、回答として示した。その内容は、〈あいだを開く〉ことの具体的な言い換えにほかならない。〈縁〉は、一面識もない他人同士にも、〈出会い〉によって生じる関係を意味する。仏教徒甲とキリスト教徒乙が出会った折、相手の窮状を見かけたとする。いずれの側であれ、見かねて相手に助けの手を差し伸べることが、ふつうに行われるだろう。そうした場合、それぞれの信仰する神(仏)が、たがいに異なろうとも支障ないというのが、「ご縁があつて…」という〈縁の倫理〉である。〈縁〉の語は、仏教に由来するが、「隣人愛」——これも別にキリスト教に限定されない——の精神である。

〈縁の倫理〉には、二つの〈あいだ〉が関係する。一つは、〈水平のあいだ〉(ヨコのつながり)、もう一つは〈垂直のあいだ〉(タテのつながり)である。具体的に言えば、〈水平のあいだ〉とは、同じ神を信じる信者同士が、絆を結ぶということである。〈垂直のあいだ〉とは、信仰共同体の内部で、各信者が神に寄せる信仰である。しかし、これらの〈あいだ〉だけでは、各共同体が内部で結束する反面、信仰を異にする異教徒に対して、たがいに反発し合い、排除し合う関係を越えられない。そこで私は、信仰共同体の壁をのりこえるための

理念を、仏教由来の〈縁〉に求めた。多神教の仏教とは異なる一神教のキリスト教、イスラームにおいて、〈縁〉に相当する言葉が、仮にないとしても、〈あいだ〉を開こうとする精神は、現に脈打っていると私は信じる。

#### 4 かたちの論理<sup>3</sup>

##### 1930年代の日本哲学

「形の論理」を日本で提唱したのは、昭和初期（戦前戦中）に活躍した三木清と、その師西田幾多郎である。この二人は、西洋哲学から多くを学びつつ、日本独自の思想である〈形〉の意義を活かす日本哲学の論理を作り上げようと志したものの、目的をはたせずに終わった。私は、彼らのひそみに倣い、自分なりの〈かたちの論理〉を仕上げた。

三木と西田は、いずれも東洋的な「形なき形」を追究すると標榜した。にもかかわらず、彼らのしたことは、西洋哲学を手本として、そこに「形の論理」を読み込もうとする企てでしかなかった。だがそれは、無理な試みであった。というのも、〈かたち〉は、その先に〈かた〉を予想する。〈かたち〉と〈かた〉には、〈かたち〉の反復から〈かた〉が生まれる一方、逆に、〈かた〉から数多の〈かたち〉が生じてくるといった、たがいに不可分な相互作用がある。そのような〈かたち〉と〈かた〉の関係は、日本文化に典型的であるものの、西洋哲学にその種の思想は存在しない。日本や東洋にあって、西洋にないもの、それは〈型の文化〉である。

##### 日本文化——型の思想

「～道」と呼ばれる稽古事（ex. 茶道、華道、柔道、剣道）を手がけた人なら、誰でも承知しているように、修行の過程では、稽古、つまり身体的実践（かたち）を繰り返すことで、手本となる〈かた〉を修得することが求められる。しかし、〈かた〉の修得は、入門時の目標であるものの、それが最終到達点ではない。一定の〈かた〉を修得した者には、そこから新たな〈かたち〉を実践することで、〈かたやぶり〉を試みつつ、最終的にその主体による新しい〈かた〉を生み出すことが期待される。このように、「～道」の修行には終わりが無い。重要なことは、〈かた〉が固定的で恒久的なモデル、絶対的規範ではない、という考えである。その考えは、〈かたち〉と〈かた〉が対立することなく関係し合い、たがいの地位がしばしば入れ替わる、という事実を物語る。

これに比べて、西洋文化に前提されているのは、絶対的な原理が個々の実践を支配する、という考えである。その考えは、絶対と相対、神と人間を根本から区別して、混同を許さない、という「二元論」から来ている。西洋文明の根柢にある哲学（形而上学）は、三千年近

---

<sup>3</sup> これまで私は、「形の論理」と表記してきた。しかし、先般知り合った中国人哲学者許焜（Hui Yuk）から、「かたち」に「形」を充て、「かた」に「型」を充てるという慣用は、漢字の老家中国では妥当性を欠くとの指摘を受けた。そのため、元々日本語である「かた」「かたち」を、そのまま用いることにした。

いあいだ、このような二元論に支配されてきた。近代の哲学者デカルトは、「考える我」と「延長物体」を、異なる「実体」として明確に区別した。その立場——物心（心身）二元論——は、しかし、古代以来つづく二元論の近代的リフォームに過ぎない。二元論は、〈絶対〉である神に支配される〈相対〉、つまり人間の自由を著しく制約する。そういう思想の支配から逃れたい、という切実な欲求が、とりわけ「ポストモダン」と呼ばれる現代思想では、顕著になっている。しかし、「二元論を超える」というスローガンを叫ぶ者は、西洋世界に数多くいるが、一人としてそれに成功した者はいない。二元論をのりこえるには、「神」のような絶対者を想定する世界観を、根柢から覆す必要がある。それは、当の世界に生きる者にとって、自分の呼吸する空気を拒否し、おのれが生きている大地をひっくり返すことにも似た、冒険を意味する。そんなことが、ふつうにできるわけではない。

今年の5月、私は、韓国ソウル市に赴き、テクノロジーをテーマとする研究会（国際ワークショップ「今日の風土の政治学」）に参加した。そのさい、テクノロジーの暴走を止めるために、〈かたちの論理〉の非二元論的思考が不可欠である、という主張を行った。そういう主張の底には、AI、ロボット工学、VRなどをめぐるイノベーションは、二元論に由来する〈欲望の論理〉の典型的表れである、という確信がある。欲望と技術の関係を徹底解明する「技術の哲学」を、これから展開しなければならないと考えている<sup>4</sup>。

---

<sup>4</sup> 本会に先立つ9.20、私はデンソー東京支社における「欲望と、技術の哲学」と題するトーク・セッションに招かれ、「人工生命」の開発者である池上高志氏（東大教授）と対談して、所信の一端を披歴した。